

● 第6回仙台国際音楽 コンクール

沼倉 淳
(河北新報社生活文化部記者)

仙台市で3年に1度行われる協奏曲を課題曲の中心に据えた第6回仙台国際音楽コンクール(仙台国際音楽コンクール組織委員会、仙台市、同市市民文化事業団主催)が2016年の5、6月に仙台市青葉区の日立システムズホール仙台(仙台市青年文化センター)で開かれた。ヴァイオリン部門は5月21日～6月4日、ピアノ部門は6月11日～25日に行われ、出演者のレベルの高さや公正で信頼性の高い運営、約250人のボランティアのホスピタリティーに満ちたサポートなどが相まって、「楽都・仙台」に根付いた国際コンクールを強く印象付けた。「協奏曲が課題曲」という理由で出場を申し込んだ人が少なくなく、今回は32の国と地域から370人の出場申し込みがあった。課題曲の難易度が高い中、両部門共に韓国勢を筆頭にアジア系の出場者の活躍が光った。

ヴァイオリン部門(審査委員長・堀米ゆづ子ブリュッセル王立音楽院教授)には9の国と地域から32人が出場。指揮は京都市交響楽団常任指揮者兼ミュージックアドバイザーの広上淳一が務めた。ファイナルの審査委員として世界的なヴァイオリン奏者ゴドン・クレメルが名を連ねたことも話題となった。その結果、1位がチャン・ユジン(韓国)、2位がステイブン・キム(米国)、3位が青木尚佳(日本)、4位がアンナ・サフィナ(ロシア)、5位がメルエルト・カルメノワ(カザフスタン)、6位が岡本誠司(日本)だった。

1位のチャンは曲の解釈が深く、オーケストラとの意思疎通が巧みで協奏曲を演奏する総合力が際立っていた。ファイナルのストラヴィンスキー「ヴァイオリン協奏曲」は、オーケストラとの掛け合いが抜群で表情豊かな演奏だった。チャンは9歳で韓国のKBS交響楽団と共演し、11歳でリサイタルを開いた逸材。韓国国立芸術大を首席で卒業し、米国のニューイングランド音楽院でミリアム・フリードに師事している。セミファイナルは演奏機会の少ないシューマンの協奏曲が課題曲の1つだったが、この曲をどう弾きこなすかが同部門の大きなヤマ場となった。チャンは臆することなく、実力を発揮した。

ピアノ部門(審査委員長・野島稔東京音大学長)には9カ国から34人が出場した。指揮は仙台フィルハーモニー管弦楽団常任指揮者のバスカル・ヴェロが務めた。今回からファイナルはモーツァルトの指定された5曲の中から1曲と指定されたロマン派以降の作曲家10人から1曲を選ぶ方式となった。ファイナルの課題曲が2曲に増えたことで、より総合力が問われることになった。セミファイナルはベートーヴェンのピアノ協奏曲の第3番か第4番の選択だった。「若いうちにこれらの作品に取り組むことは財産」という野島審査委員長の意向があった。1位がキム・ヒョンジュン(韓国)、2位がエバン・ウォン(米国)、3位が北端祥人(日本)、4位がシャオユー・リュウ(カナダ)、5位がシン・ツァンヨン(韓国)、6位が坂本彩(日本)だった。

1位のキムは予選、セミファイナル、ファイナル共に安定した演奏で頂点に立った。中でもファイナルで選んだブラームス「ピアノ協奏曲第1番」は圧巻だった。男性的で重厚な難曲だったが、女性特有のしなやかな強さを巧みに生かし、熱演した。

大舞台にも気後れすることなく、多様な音色を弾き分け、豊かな情感で観客を魅了した。キムは韓国国立芸術大を経て、米国のジョンズ・ホプキンス大のピーボディ音楽院修士課程で学び、ムン・ヨンヒに師事している。

全体的に課題曲は難曲が多かったが、出場者のレベルは回を重ねるにつれて高くなり、技巧の巧みさだけでなく、人の心に響く演奏力が問われたとも言える。今回は両部門に合わせて、約7700人の聴衆が訪れた。予選から1000人を超える聴衆が足を運ぶコンクールは世界的にも珍しいと言われ、出場者の演奏を鼓舞することにもなった。今回初めて実施したインターネットによるライブ配信には、国内外から約15000件のアクセスがあった。審査委員によるマスタークラス(26回)や次の審査段階に進めなかった出場者によるチャレンジャーズ・ライブ(4回)、仙台市内の小学校を会場にした学校訪問ミニ・コンサート(10校)なども行い、クラシック音楽愛好者の裾野を広げる試みとして有意義だった。

特筆したいのが、ホストオーケストラである仙台フィルハーモニー管弦楽団の献身的な演奏ぶりだ。過密なスケジュールの中、出場者が実力を発揮できるように一人一人の個性に合わせて、きめ細やかな演奏に徹し、「楽都・仙台」のプロのオーケストラの底力を見せた。若い出場者にとって、プロのオーケストラと共演できたことは大きな財産となったはずだ。大勢の観客の前で演奏した経験も今後の成長の糧になると思う。出場者の多くが今回のコンクールをステップに世界に羽ばたいていくことを期待したい。また、東日本大震災から5年が過ぎたの開催となったが、被災地を音楽の力で盛り上げることもあった。欲を言えば、もっとコンクールの認知度を高められる余地はあると思うが、仙台国際音楽コンクールは「楽都・仙台」を世界に発信する象徴になったと言っても過言ではない。